

26 寺中の鉱泉

昔々、寺中には仰山のお寺があったんで、寺中という名がついたんやと。なかでも真言宗の安養寺は、本堂や塔や鐘楼などが建ち並ぶ大きいお寺やったんで、毎日お参りの人で賑やかやったと。

このお寺の檀家に、みんなから慕われているお金持ちがいたんや。この人には、誰よりも頭がよくて手先が器用で、とびっきりべっぴんの娘さんがいたと。そやから、いつもだいにされてたんやけど、ある日娘さんはどんな名医でも治せん病にかかってしもた。あんなにきれいやった姿は見る影ものうなって、両親は嘆き悲しんだ。

お父さんは藁にもすがる思いで、安養寺に二十一日の間お籠りしてお経を唱え、ご本尊さまに「どうぞ娘の病を治してください。」

とお願ひした。すると、最後の夜になって、娘さんが不思議な夢を見た。

娘さんが村の奥の谷山に行くと、紫色の雲が立ち込めていて、そこで一人のお坊さんに出会った。

「私は薬師如来です。そなたの命はもう尽きようとしているけれど、父親の心がけに感心したので、どんな病でも治る霊泉をさすけよう。その湯に入っって自分の体を治してから、ひろくこの世の病に苦しむ人々を救いなさい。」といつなり姿は消えてしもた。

娘さんからこの夢の話を聞いたお父さんが谷山にかけつけると、大きな岩の裂け目からこんと湯が湧き出ていた。大急ぎで湯屋を建てて、娘さんをお湯に入れると、病はすぐに治ってしもた。喜こんだお父さんは、土地を寄進してお堂をつくり、薬師如来の像をおまつりした。

それからというもの、温泉の評判を聞いた人たちが遠くからもやってきて、宿屋や土産物屋が軒を連ねて、すごく繁盛したそうな。

ところが、何を思ったか、白馬の頭を温泉に投げ込んだもんがおった。すると、たちまち温泉は冷泉に変わってしもた。それから間もなく合戦があり、あたり一面焼け野原になってしもたっちゅうことや。

昭和の中ごろまで、ここには「寺中の湯」といって、鉱泉宿があった。

その泉源は今もゆるやかに湧き出している。

